

自都市評価における世代間ギャップ

財団法人 山口経済研究所
調査研究部長 宗 近 孝 憲

はじめに

それぞれの都市がどのような姿の都市であるべきかについては、それぞれの都市ごとに複数の姿が候補として挙げられるであろう。その候補を絞っていく際には、現状の都市の姿についての市民の不満を解消し、また、市民が自都市の将来像として望んでいる姿を尊重していくことが必要である。つまり“既存の”都市住民の意向を反映させていくことは、今後の都市づくりにおける十分条件ではないにしても必要条件であろう。

その際、同じ自都市住民でも、世代間で、現状の都市に対する不満の内容に違いがあり、望ましい将来の都市像の内容にも違いがあることが考えられる。従って、世代ごとの住民の思いを把握し、世代間の思いのギャップを理解しておくことも重要である。

そこで、今後の都市づくり方向の“模索”に資するため、山口県下の代表的な5都市の都市住民に地域評価関連のアンケートを行い、これを世代別に考察してみた。

1. アンケート実施概要

本報告は、山口経済研究所で毎年実施している『山口県民アンケート』の質問項目のうちから、地域評価関連のものを抜粋して組み立てたものである。

『山口県民アンケート』のアンケート対象は、山口県の広域市町村圏の中心都市であり、かつ人口10万人以上の、岩国、徳山、山口、宇部、下関の各都市住民である。アンケートは、電話帳により都市ごとに無作為抽出した先に電話し、その家族の内だれか1人（年齢・男女属性で案分）にアンケート依頼して、協力の意志表示を得られた先に調査票を郵送して回

年別、都市別サンプル数

	97年度調査	98年度調査	99年度調査	3カ年平均	
合計	804	840	885	843	
都市別内訳	岩国市	155	158	175	163
	徳山市	149	162	173	161
	山口市	168	170	175	171
	宇部市	160	159	172	164
	下関市	172	191	190	184

男女、世代別サンプル数

	3カ年平均	構成比(%)	
合計	843	100.0	
男女・世代別内訳	男性	407	48.3
	青年(18~34才)	152	18.0
	うち独身者	104	12.4
	中年(35~59才)	128	15.2
	高年(60才以上)	127	15.1
	女性	436	51.7
	青年(18~34才)	168	20.0
	うち独身者	88	10.4
	中年(35~59才)	137	16.3
高年(60才以上)	130	15.4	

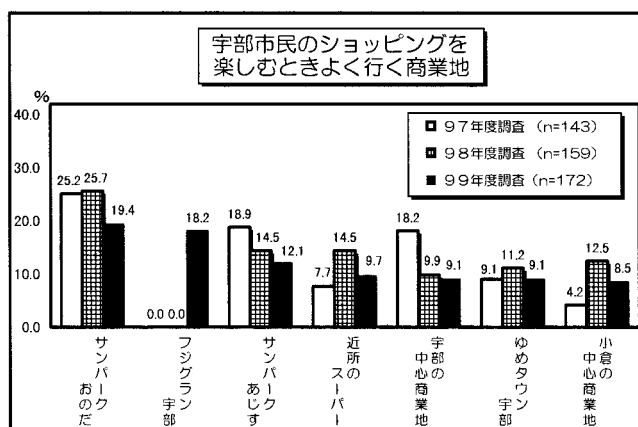
収したものである。回収サンプル数および属性構成は前ページの表の通りである。

2. 結果概要

(1) 自都市の中心商業地に対する評価

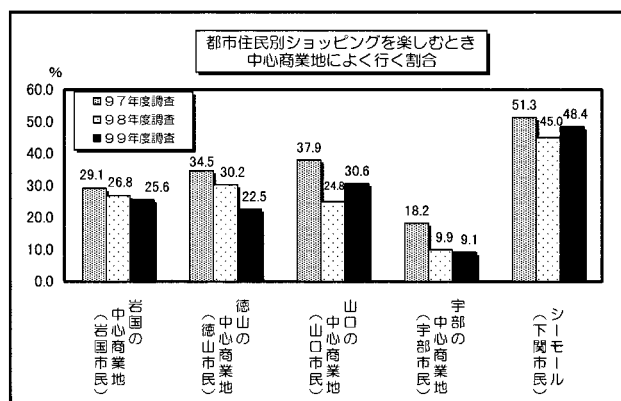
まず、アンケートの中で、「あなたがショッピングを楽しむとき、よく行く商業地はどこか」を固有名詞（自由回答）でたずねた結果を紹介する。

右図は、宇部市民の回答結果である。「中心商業地」（回答のあった固有名詞の商業地のうち、いわゆる都心部分に立地する商業地の回答を合計したもの。したがって、都心に立地するものであれば、商店街も百貨店など大型店もすべて含む）との回答は年々低下しており、98年度以降10%を切っている。



回答の多かった順位でみても、上位の3商業地は、市内外の郊外に立地する大型店（フジグランは99年度新規開業）が占めている。宇部の中心商業地は、これら郊外の大型店と、さらには「近所のスーパー」（回答のあった固有名詞の商業地のうち、各居住地近隣のスーパーマーケットの回答を合計したもの）の回答をも下回り、第5位となっている。このように、山口県で2番目に人口の多い宇部市では、すでに“中心”商業地が体を成していないのが現状である。

こういった傾向は、宇部市においてだけみられる現象ではない。下図は、各都市ごとに、市民が「中心商業地」と回答した割合を示したものだが、山口県下で中心商業地がよく形成されているとされる、岩国市、徳山市、山口市の3市でも自都市の「中心商業地」を回答した割合は2～3割に過ぎない。やはり、郊外の大型店、もしくは、隣県大都市の商業地の回答が多くみられたのである。また、これらの都市でも、「中心商業地」との回答比率が年々減少している。



なお、山口県で最大の都市である下関市では、いわゆる中心商業街区といった意味での

固有名詞の商業地（例えば、グリーンモール、茶山商店街、唐戸商店街など）の回答はほとんど皆無で、都心に立地しているショッピングセンター「シーモール」に回答が集中している。

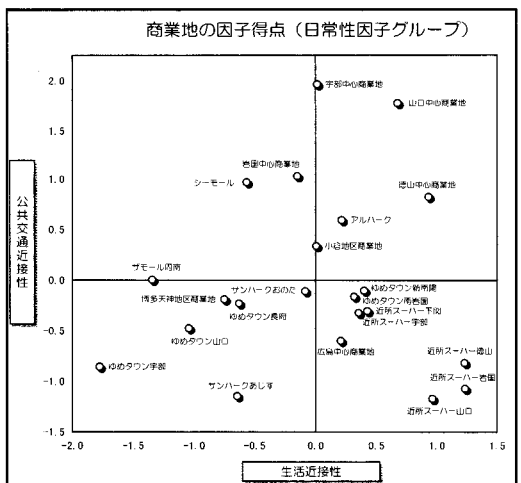
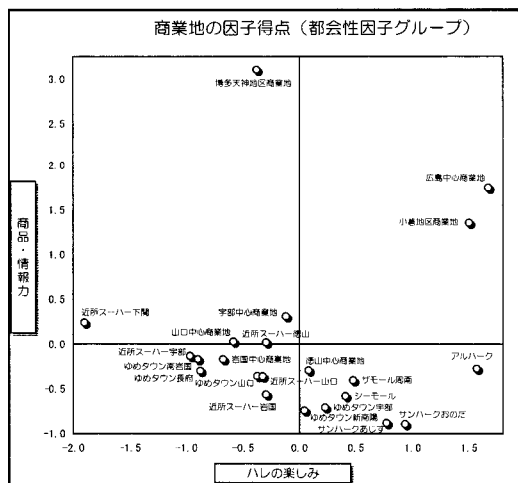
この、ショッピングを楽しむときよく行く商業地を回答してもらったあと、「では、その商業地によく行く理由は何か」をたずねている。各商業地ごとに得られたその結果を因子分析したものが下図である。

各都市の「中心商業地」は、商品力・情報力において隣県大都市部の商業地に遠く及ばず、ハレの楽しみの場としては、むしろ郊外型大型店に後れを取っている。たまたま都心に立地しているので公共交通近接性に利点があることと、「近所のスーパー」と同様、生活近接性をもっているのが特徴である。いまや、各都市の「中心商業地」は、非日常的な、都会的な場としての機能は持ち合わせていないのである。

因子負荷量（バリマックス回転後）

因子のネーミング	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
	都会性因子グループ		日常性因子グループ	
	商品・情報力	ハレの楽しみ	公共交通近接性	生活近接性
寄与率(%)	27.08	23.25	10.87	9.83
そこにしかない商品があるから	0.859			
何かと新しい情報が得られるところだから	0.837	0.341		
都会的雰囲気を楽しめるから	0.807	0.471		
品数が豊富だから	0.362	0.724		△ 0.323
食事も楽しめるから		0.704		△ 0.460
その商業地で時間を過ごすことが自体が楽しいから	0.581	0.688		
家から近いから	△ 0.395	△ 0.721	△ 0.343	
駅やバス停から近いから			0.635	
通り道だから		△ 0.319		0.626
安いから	△ 0.318		△ 0.530	0.388
なじみの店があるから			0.492	0.358

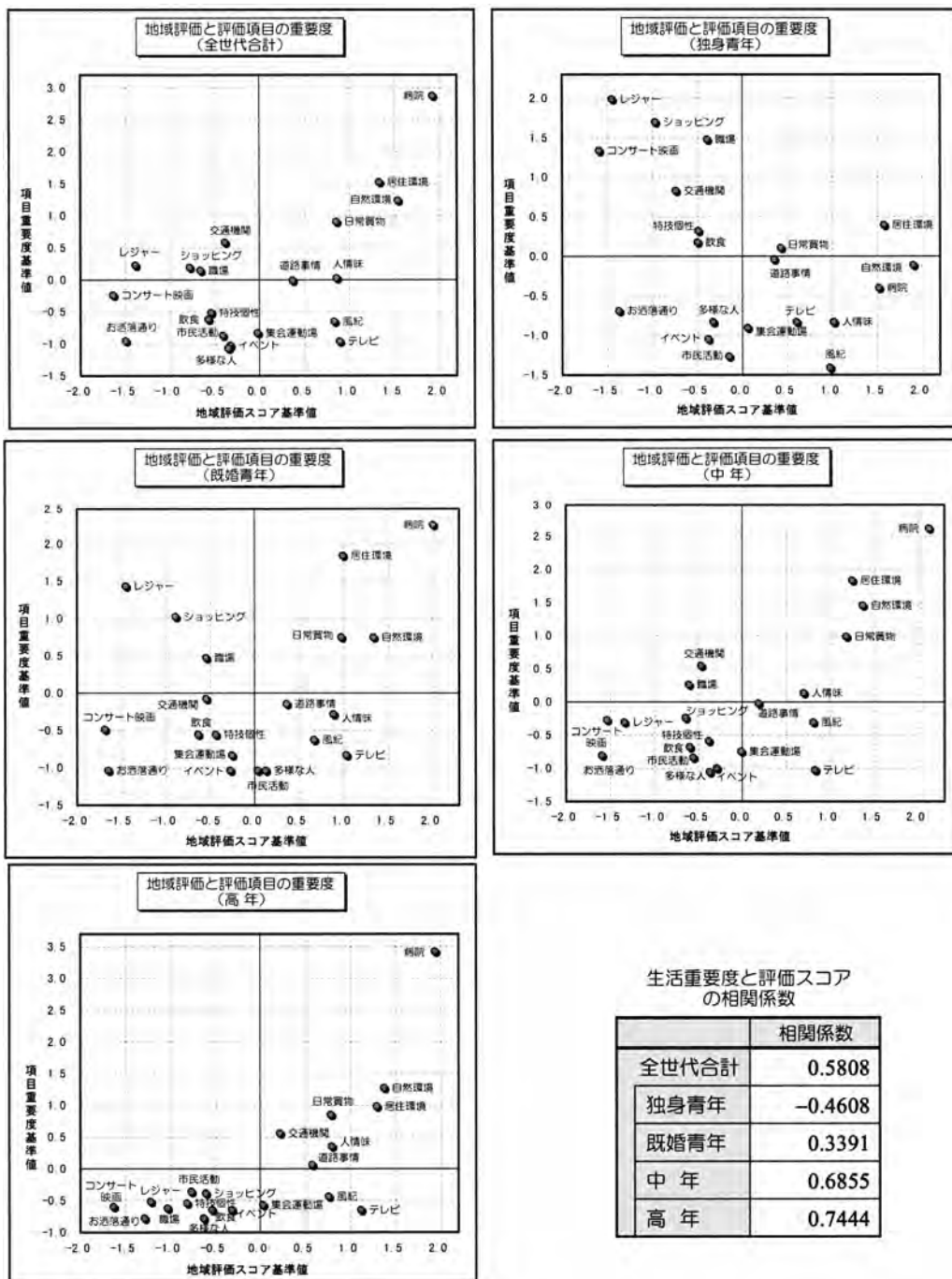
注) 因子負荷量が±0.3以上のものを掲げた



このような「中心商業地」の実態については、世代間で認識、あるいは受け止め方に大きな違いがあるようだ。というのも、次ページの図にみるように、商業地ごとのよく行く回答割合を世代別にみると、高年者（60歳以上）は、今もって「中心商業地」に行く割合が非常に高く、一方中年者は郊外型ショッピングセンターに、若者は郊外店や隣県大都市部の商業地に行く割合が高いのである。従って、自都市の中心商業地というものについて、高年者は比較的満足しており、中年はやや不満（郊外店で代用）、そして若者は全く不満であることが推測される。

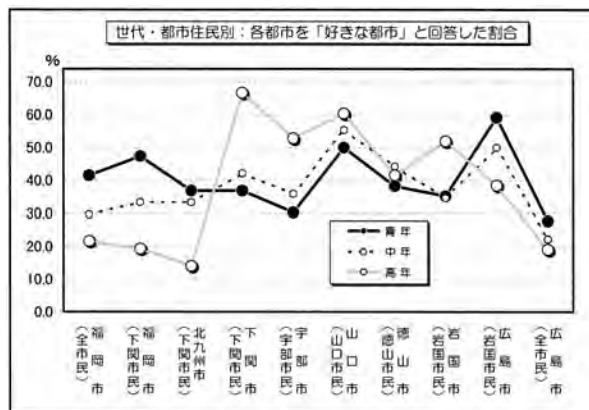
度は、高年者では正の相関、若者では負の相関がみられたわけである。

高年者が重視しているのは「病院」「自然環境」「居住環境」など自然や暮らしやすさにあり、若者が重視しているのは、「レジャー」「ショッピング」「職場」など都市的機能にあった。そして、これらについての評価そのものは、前者については評価が高く、後者については評価が低いことは各世代にわたって共通していた（従って、高年者は正



の相関、若者は負の相関となったわけである)。ということは、自然や暮らしやすさに優れており、都会的機能に劣っているという山口県民みなが評価する特徴そのものが、高年者にとっては望ましいふるさとと映り、若者にとっては望ましくないふるさとと映るはずである。そのことが、自都市を好きな都市と見るかどうかの違いとなって表れているかもしれない。

実際、そうになっている。下図は、山口県下の5都市及び隣県の大都市を並べて、これらの中から好きな都市を複数回答で挙げてもらったアンケート結果である。高年者は自都市を「好きな都市」としているが、若者は高年者ほど「好きな都市」とは見えていないわけである。そして若者は、自都市よりもむしろ近隣の大都市を好きな都市に挙げているわけである。



3. 総括

自都市評価については、世代間でギャップがあることが確認できた。若い世代では都市的魅力が乏しいことをもって評価が低くなっており、高年になるほど自然や生活環境が充実した土地柄であることをもって評価が高くなっている。

問題が大きいの、若者である。一言で言えば自都市が「都会でない」ことに不満を持っているので、地方都市において真正面からこれに対処するには限界がある。「都市圏」域が広域化している今日、必ずしも「居住市」のエリア内で都会らしさを自己完結させる必要もないはずだから、若者に対しては、さらに踏み込んだ意識調査と、自都市像に関する“話し合い”が必要になってこよう。

おわりに

今回の調査は、山口県下では比較的大きな都市部の住民だけを対象としたものであった。今後は、町村部も含めた調査を実施し、中心都市と周辺地域との関係も考察してみたい。そして中心都市と周辺地域が一体となった、より広い圏域で地域を考えてみたい。そのような中から、周辺地域の充実した自然環境や居住環境（交通の問題を解決する必要はある）と中心都市部の都市機能がうまくセットできれば、そしてこれに隣県大都市のより高次な都市機能も容易に享受しやすい形が出来れば、高年者にとっても若者にとっても、また周辺地域住民にとっても中心都市住民にとっても、ひとしく住みやすく満足できる都市圏域が形成できるのではあるまいか。